

○二〇〇九年度中国化学会 大会シンポジウム

「人文系中国研究の将来…視点、枠組み、そして技法の継承と発展」

中国の経済規模が拡大し、国際政治における重要性も増大するにつれ、中国研究というと経済、経営や国際関係、安全保障の分野がそれを代表するようになった。近世、近代を通じて主流を占めてきた文学、思想などの研究は、もはやマイナーな存在であることを直視しなければならぬ。大学院への進学者の減少に日本のどの大学も悩んでいることがその証である。

このような状況下で、大上段に構えた言い方をすれば、中国化学会会員を含め現代日本の人文系中国研究者は、長い歴史を誇る研究の蓄積、およびその方法論を、より発展させた形で次世代へと受け渡す責務があるだろう。

研究課題も世代もそれぞれ異なるパネリストで組織した今年度のシンポジウムは、そうした自覚を共有する手始めである。基調講演を除き各パネリストの演題を特に設定しないで、シンポジウムの趣旨に基づき、各分野の学問的変遷や行く末について、それぞれ個人的視点から自由に語って頂くことにした。パネリストが継承した研究技法や研

究枠組み、あるいは各分野が取り組んできた課題、切り開いた新局面、さまざまな内容が討議されよう。

「基調講演 「越境して活性化する中国語学」

佐藤 進 (二松学舎大学)

パネリスト 高橋 未来 (筑波大学)

松村 茂樹 (大妻女子大学)

司会 松村 茂樹



越境して活性化する中国語学

佐藤 進

まず、たとえば『日本中國學會報』第六十集を参考に、ネイティブ執筆者の比率を見てみると、①哲学で10%、②文学で20%、③語学では45%である(哲学論文740点、文学論文700点、語学論文580点)。また、第六十集「学会展望」の記述範囲を見ると、①哲学②文学ではほとんど国内業績に限るが、③語学では海外の単行本にも言及している(かつては、①哲学②文学では国内国外を区分して紹介していたが、③語学ではその区別をしない)。すなわち、語学のジャンルにおいては「国内国外を区分しない」発想が自然なものとして定着しているといえるだろう。

次に、同じく第六十集所載著作物の伊藤智ゆき『朝鮮漢字音研究』、遠藤光暁等編『韓國的中國語言資料研究』、『東ユーラシア言語研究』、内田慶市等編『19世紀中国語の諸相—周縁資料(欧米・日本・琉球・朝鮮)からのアプローチ』などは、かつて有坂秀世(日本語・河野六郎(朝鮮語)・三根谷徹(越南語)などの先学がものした業績のように、研究対象の言語を越境するものである。また、彭飛編『日中対照言語学研究論文集』、藤田昌志『日中対照表現論』などは、中川正之・西光義弘・益岡隆志編『シリ-

ス◎言語対照(外から見ると日本語)』や伊地智善継・大河内康憲などの先学の業績を受け継ぐものであり、日本語と中国語の比較ないしは対照研究が言語研究の方法として不可欠であることの証である。

研究者の越境も盛んであることを見てみる。画期的な刊行であるところの曹志耘編『漢語方言地図集』については岩田礼・秋谷裕幸らの貢献があったが、これは科研の「漢語諸方言の総合的研究 Project on Han Dialects」から『漢語方言解釈地図集』に至る20年の成果をふまえてできたことである。この科研代表者は岩田礼↓平田昌司↓遠藤光暁↓太田斎↓岩田礼と続いたもので、各々の出身校が全く異なるこのネットワークについて、かつて『中国学会五十年史』に紹介したことがある。一方に、日本における中国人ネイティブのネットワークによって出来た研究雑誌の存在も貴重である(『現代中国語研究』)。また、中国に向けて日本の業績を紹介する動きもかつてよりは盛んである(『日本現代漢語語法研究論文選』)

以上、国内国外の研究業績の越境、研究対象の越境、研究者の越境などに支えられて、中国語学研究が活性化しているさまを紹介した。

(一)松學舎大学文学研究科)

私の提言

高橋 未来

人文系中国研究の継承と発展には、①大学生から一般人を対象に中国学への興味を喚起して研究者を養成し、②研究者同士が結束して学会の活性化を図るといふ、二点を如何に行うかが鍵となる。

①の大学の学部生に対しては、教員養成系クラスでは漢文講義が即戦力を磨くキャリア教育となることを強調したい。訓読は今では馴染みが薄くなったとはいへ、学生の反応は悪くなく、パズル感覚で楽しむ人も多い。また非教員養成系クラスにおいても、中国語は現代日本語の土台となってきたのだから、中国文化も「基礎教養」に相当する、ということを強調してはどうか。

講義においては、学生に中国学と彼等自身との繋がりを実感して貰うことが有効である。例えば江戸・明治期の日本人による漢文小説を使用し、講義の中で著者の墓を訪れる等の機会を設ければ、学生にとって漢文・中国文学が「外国のよく分からないもの」ではなく、「場所や言葉が全て今の自分達に繋がっているもの」と理解するだろう。大学の意義は、学問の奥深さを味わえることであり、我々は中国学の講義を通して、学生の知的好奇心を刺激し、満た

すことができる。無論中国学に限らないが、人文系研究者はこの点をもっと主張して欲しい。

ところで、研究の道を歩み始めた大学院生にとって、大学教員への就職が困難だと、生活の不安は切実である。知識を体系化するのには時間が掛かり、腰を据えて研究をするには先々の不安がない方がいい。その解消法には、業績を増やすこと以外にも、高校の教員免許取得や、例えばパソコン関係の中国語などニーズがある分野にアンテナを張ることが考えられる。生活の手段を用意することは、精神衛生上欠かせないと実感している。

②については、研究者が協力体制を整えて内側から活性化を図ることこそ急務と考える。例えば学会の回数を増やす、分科会を作る、若手会員に企画を任せる、メーリングリストで情報を共有する等が考えられる。日本にサバティカルチーム等で滞在する中国人研究者とも、交流の機会を活発にしたい。入会の規定についても、所属の有無に拘らず敷居を低くして欲しい。

今後の学会では、幾つもの領域に亘る学際的研究が増えてゆくだろう。それには異なる分野同士の交流が必須で、その交流の機会を体制化する必要がある。そこで、テキストの選定は難しいが、日常的な共同研究会を行うのはどう

か。分野の壁をなるべく低くして、日頃から互いの研究成果や技法を共有することが、人文系中国研究の継承と発展に繋がると考えている。

(筑波大学)

私の文化論

松村 茂樹

学生時代、ある日本文学の授業に出ていた。ある作家のある作品を分析する演習であった。私は、意気込んで、この作家が、こういう状況であったから、こうった作品を書いた、といった発表をした。だが、担当の先生は、やり直しを求められた。私の発表が、作品ではなく、人と時代背景を扱っていたからだ。

だが、私は、作品より、人と時代背景に興味があった。そのことをその先生に申し上げると、それは文化論だと言ってくれた。それ以来、私は、自分の専門を「中国文化論」としている。

文化の「文」とは、もとは「いれずみ」という意で、「いれずみ」が「マーク」となり、「マーク」が「装飾」になり、「装飾」があれば「すばらしい」という意となつて、人が「すばらしい」状態に変化して行くことを「文化」というとのこと(白川静説による)。

さすれば、文化論は、人がすばらしくなつて来た営みすべてを包括して研究することになる。もちろん、作品研究もその内の重要な一分野であるはずだ。

本学会は、中国文化学会である。実は、私は、この命名が行われた時、とてもうれしかった。これは自分の専門もそこに加わることができたからというばかりではない。学問は広い視野で行つてこそ、よりすばらしい成果が生れると思つてゐるからだ。

ここに、「作品」を分析する人も、「人」を探求する人も、「社会」や「時代」を考察する人も、どのような人もみな集い、さまざまな角度から語り合い、論じ合つている。なんともすばらしいことではないか。私がこの学会を愛し、可能性を信じる所以である。

この学会がこの方向性をとる以上、私はこの学会の発展を疑わない。

(大妻女子大学)